

2021年度の目標・計画

進捗・達成状況

【目標】

地域共生社会に必要な財源調達に関する研究の取り纏め



取り纏めを終え、地域共生社会研究所等で報告関連論文の執筆もほぼ終了、刊行は未定

【研究項目・計画】

森林環境税導入に至る受容性涵養等の補足追加ヒアリング



一部の追加ヒアリングを実施

共生社会実現財源としての森林環境税の教訓構造分析・租税論から見た分析



達成

武蔵野市の将来像と実現性の検証簡易な課税シミュレーション



課税シミュレーションは限定した前提条件下で実施、国税化した場合の税収規模や課題も実施

武蔵野市を題材にした具体的な条例案の提示



達成



コロナ禍の影響と対応策

コロナ禍の状況次第としていた自治体への追加ヒアリング  
⇒当初想定した規模を縮小、一部自治体について実施

# 2021年度の研究進捗・成果報告

## 1) 社会の分極化に関する研究

[成果：①、③]

- ✓ 労働市場が流動化・分極化する時代において、先進資本主義諸国では共通して中間層の衰退に歯止めがかからない一方で、各国の社会的亀裂のあり方には分岐が生じていることを明らかにした。英国では、不安定労働者層において、年代、居住地域による分極化が顕在している。日本では、雇用に連結した社会保険からも福祉からも漏れ落ち制度の狭間にある「新しい生活困難層」が拡大している（宮本太郎氏の近著での知見の紹介、検討）

## 2) 共生社会を志向する政策デザインの研究動向と実践の研究 [成果：①、②、③、④、⑦]

- ✓ ベーシックインカムを含む現金による所得保障・従来の社会的投資型サービス給付の限界を乗り越える体系的な政策アイデアである「ベーシック・アセット」の検討。

→ベーシックアセットとは、地域密着型包括支援によって、支援を必要とする個人に最適な所得保障+支援サービス+コモンズを社会権として提供する。日本における困窮者自立支援、介護の包括的支援の蓄積が活用される。

## 3) 政党間競争から見るリベラル・デモクラシーの現在に関する研究

[成果：⑤、⑥、⑦、⑧]

- ✓ 多数決型デモクラシーの前提である政権交代のあるデモクラシーにおける政党間競争の条件、とりわけオポジションの機能について再検討した。
- ✓ 議会レベル、選挙レベルでの制度措置、政党の権力資源などを比較検討し、政党間競争のあり方を国際比較し、権力の抑制機能が発現する仕組み、多数派が交代するメカニズムを分析した。
- ✓ 政権交代や緊張感のある政党間競争は、政治と民意の懸隔を防ぐサーモスタット機能を果たしてきたことを明らかにし、人々の経済的・政治的疎外を緩和し、民意を反映した政策アイデアがインプットされる上で不可欠であることを確認した。

# 澁谷智子 2021年度 研究成果進捗状況



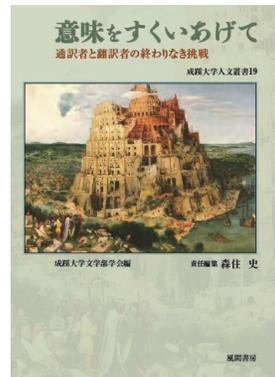
参議院や厚労省のほか、多くの自治体等でヤングケアラーに関する講演を行った。



成蹊大学「コミュニティ演習」の授業で「メンタルに不調を感じる親を持つ子どもへの支援」をテーマに当事者や支援者等に話を伺い、学んだ成果を報告会とDVDの形でまとめた。



『成蹊大学人文叢書19 意味をすくあげて』でコードの手話通訳者のインタビューを基にした論文を執筆。



『精神科看護』第48巻、『障害者問題研究』第49巻第2号、『子どものからだと心白書2021』でも執筆を行った。



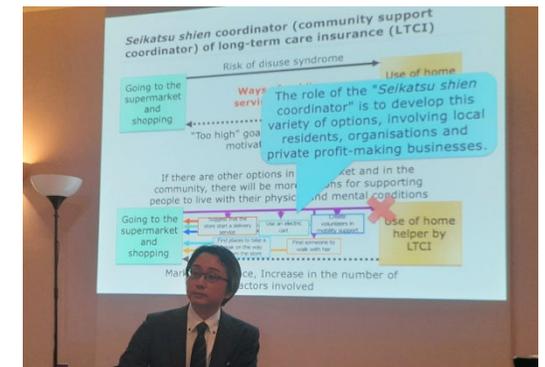
日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクトのオンラインシンポジウムの司会を行った。

# 2つのアプローチによるコミュニティでの非専門家による福祉提供 (渡邊大輔)

- ▶ 背景：コミュニティの力を活かした高齢者の支援策をどのように構築するかが課題となっている。イギリスでは社会的処方などがNHSの計画に採択されるなど、従来のチャリティ団体による支援だけでなく新しい実践が始まっている
- ▶ そこで、2021年11月～2022年1月にイギリスにおいて高齢者支援団体やNHS関連団体8団体にヒヤリング調査を実施
  - ▶ イギリスでは、コミュニティでの非専門家による福祉提供について大きく2つのアプローチの実践がある
  - ▶ **コミュニティ・リンク・アプローチ（仮称）**：社会的処方など、困難を抱える人を適切なアセスメントによってコミュニティの資源に「**つなぐ**」
  - ▶ **アセット・ベースド・コミュニティ・アプローチ**：コミュニティの「**資源を涵養**」し、そのプロセスに地域の人々を包摂することで、人的、社会的、経済的など多様な資源が豊かなコミュニティをつくり人々を支える
- ▶ この2つのアプローチをいかに地域の文脈や人材状況に即して組み合わせるかが重要ではないかという知見を得た
- ▶ 2021年度のおもな成果
  - ▶ Watanabe, Daisuke, 2021, "Understanding diversity in later life and a new culture of aging: Sociology of aging in Japan," *International Sociology*, 36(2): 243-253.
  - ▶ Watanabe, Daisuke, 2022, Supporting older people in the community in England and Japan, Organized by the Daiwa Anglo-Japanese Foundation



世界社会学会の機関紙に、日本の老いの社会学の展開についての論文を掲載

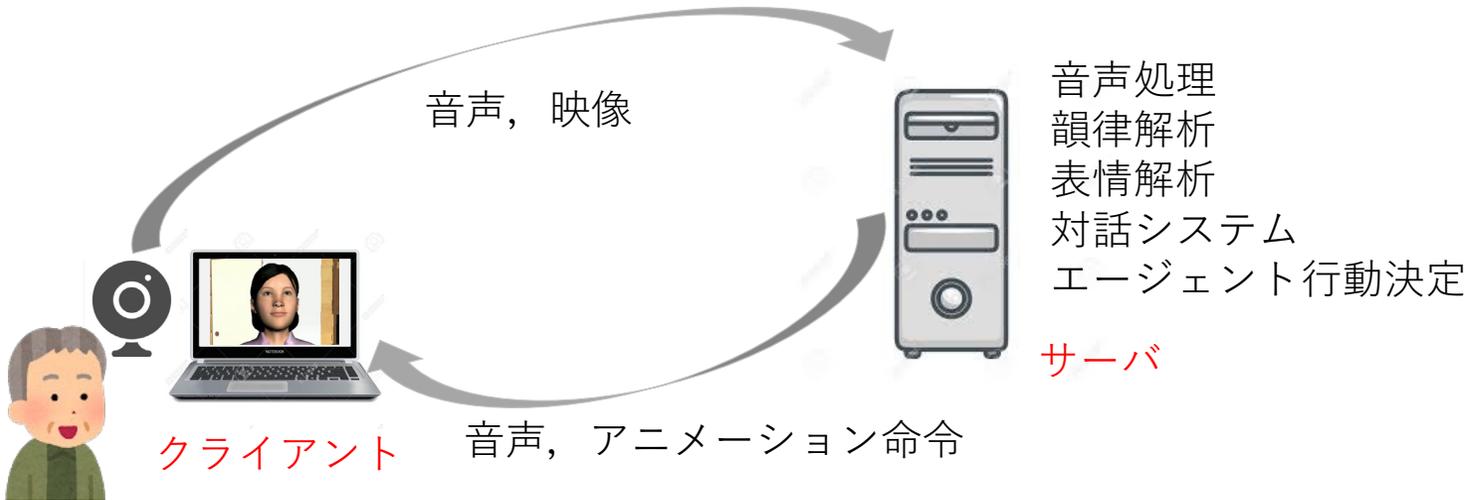


ロンドンの大和日英基金にて本テーマについての日英比較の講演を実施

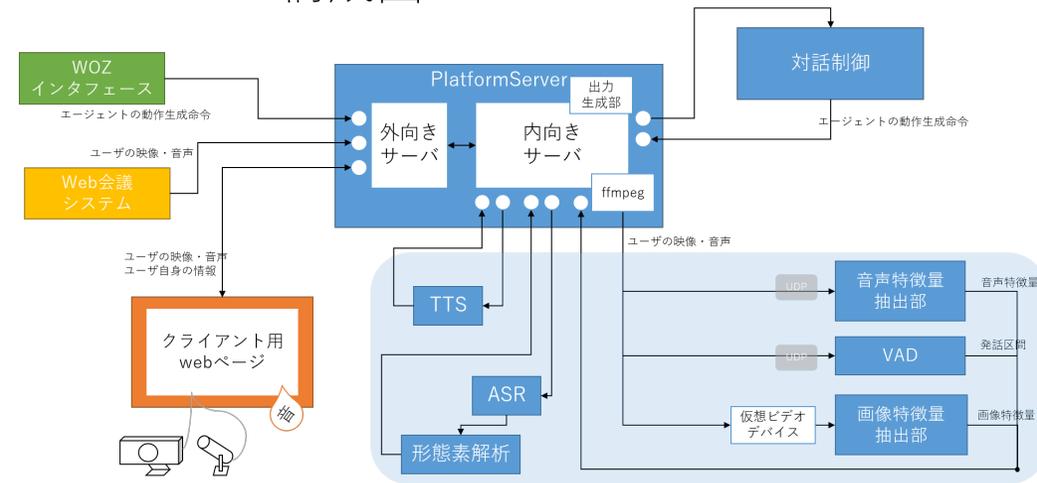
# 傾聴エージェントの研究開発

- 傾聴エージェントシステムを動作させるために多くのソフトウェアのインストールが必要であった
  - 表情認識ソフト, 音声処理プログラム, 韻律解析プログラム, 対話システム, アニメーションエンジン等

## 【研究成果①】利用者側のPCには一切ソフトウェアのインストールが必要でないシステムを開発



システム構成図



## 【研究成果②】言葉と同期してジェスチャを生成する機能を傾聴エージェントに搭載



硬貨



を使



って



ます

# 視覚障害者用情報提示システムの開発

<外出の楽しさ>

新たな情報、体験、風景



AIによる物体認識

課題

・位置がわからないと、情報として使えない。

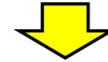


位置情報の提示の方法を検討。  
Google Cloud Visionから位置情報を抽出、立体音で位置情報を乗せて提示。



<外出の難しさ>

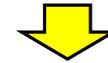
目的地が分からない、交通の危険



VSLAMによる危険検知

課題

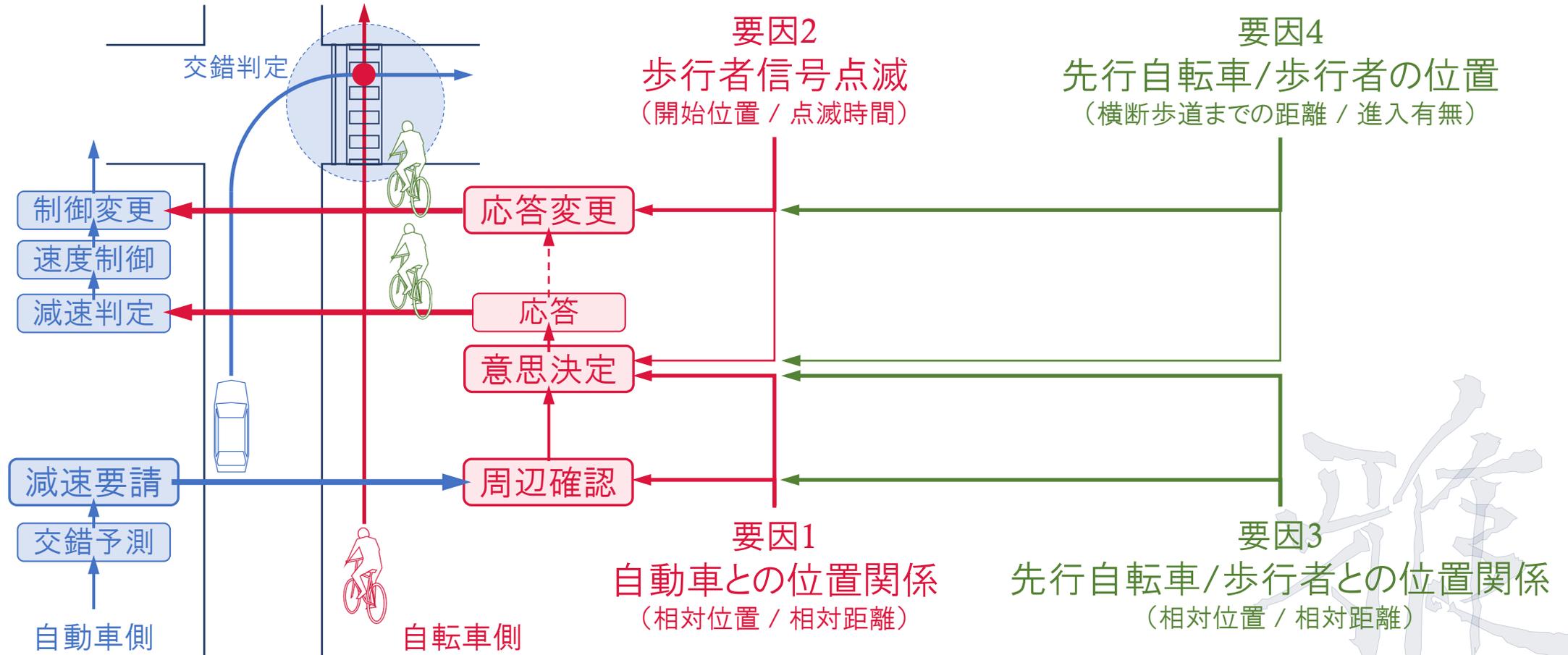
・自己位置をロストすることがある。



重要度の高い特徴点を抽出。  
遠方の目標を優先して地図を作り、映像の連続性を高める。

【実施目標】

- 情報通信を利用した自動車・自動車インタラクションシステムの効果評価
- 自転車シミュレータと自動車シミュレータの連携の実装



【進捗状況】

- 先行自転車/歩行者による、自転車運転者の意思決定・行動への影響をシミュレータ実験により分析
- 自転車シミュレータと自動車シミュレータの連携の実装 → 研究テーマの拡張へ

# 視覚障がい者の駅ホームからの転落防止:

## ホーム長軸中央部の触覚マーカの効果

大倉元宏

### 【目的】

転落防止にはホームドアの設置が極めて有効であるが、短期間での普及は難しい。そこで、ホーム長軸中央部へ触覚マーカ(30cm幅の線状ブロック)を設置した場合の効果検証を行った。屋外に島式の模擬プラットホーム(全長15×幅6×高さ0.1m)を設営し、2つのシナリオを用意した。高精度のGPSシステムで歩行軌跡を計測し、評価指標とした。

### 【方法・長距離シナリオ】

10名の視覚障がい者が参加した。男女5名ずつで、年齢は25~65歳、平均43.2歳であった。ホーム中程に模擬売店を設置し、模擬乗客(空気人形)を5体配した。ホームの一端から出発し、模擬売店を回避して他端に設定した目標まで移動することを求めた。各参加者は触覚マーカの有/無の順で、売店の左/右回避を2回ずつ行った。

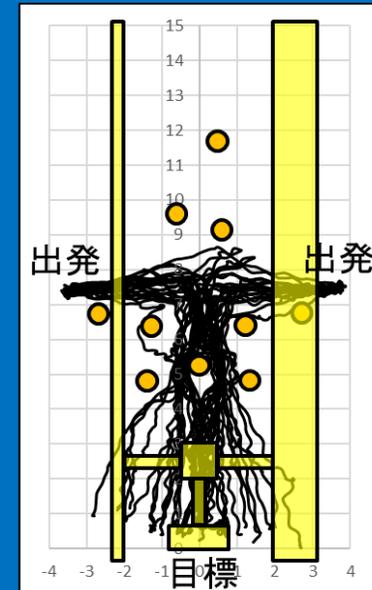
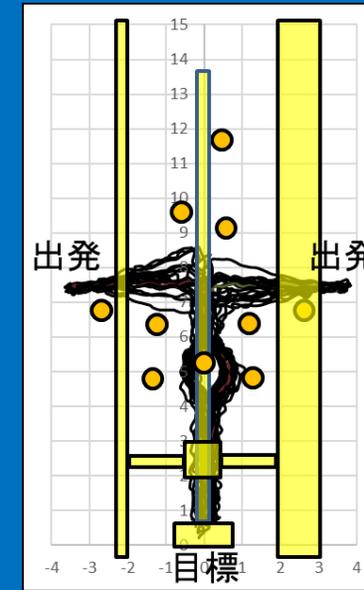
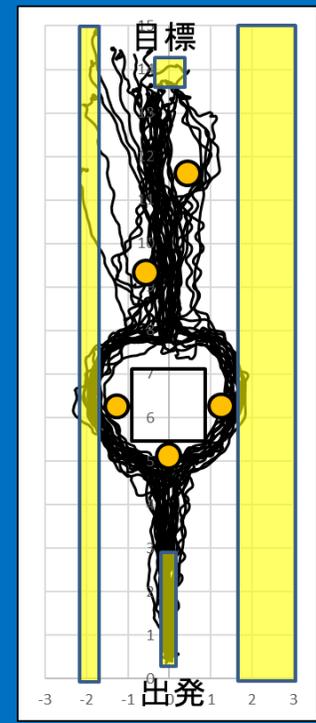
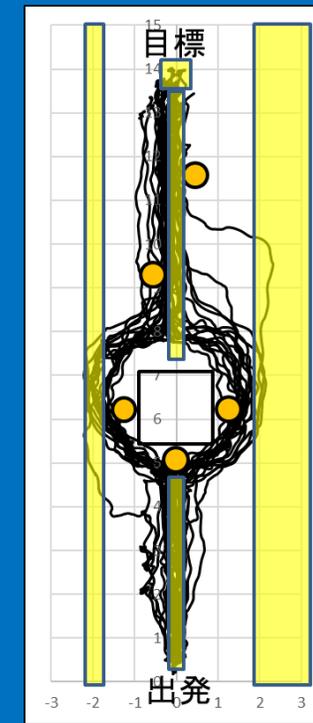
### 【方法・混雑シナリオ】

12名の視覚障がい者が参加した。男7・女5名で、年齢は28~67歳、平均46.7歳であった。両番線においてホーム中程に降車後、目標まで向かうことを求めた。その経路に模擬乗客7体を配した。経路外にもノイズとして3体配した。各参加者は触覚マーカの有/無の順で、両番線から2回ずつ降車した。

### 【結果】

両シナリオとも、触覚マーカ「有」では、全試行において安定した歩行軌跡で目標に到達した。一方、「無」では、長距離、混雑シナリオの到達率はそれぞれ67.5、62.5%で、期待経路から大きく外れる歩行軌跡もみられた。また、参加者全員、触覚マーカについて「安心感が増す」等の肯定的印象を述べた。

ホーム長軸中央部の触覚マーカは、転落防止に寄与することが示唆された。



触覚マーカ有

触覚マーカ無